

Memorial

告別式

2022年（令和4年）3月24日（木）
11：30～

博全社 臼井儀式殿 3F

はじめに

父 相原光は 2022（令和4）年 3月 15日に天に召されました。97歳でした。今まで多くの皆さまに励まされ、お支えをいただきましたことを深く感謝いたします。人生の後半はアルツハイマー型認知症となり本人の意図としないこととなりましたが、今は神に召され、母と共に安らかな眠りについていてのことと存じます。

父の足跡をたどり、父の人となりに触れていた
だきたくペンを取りました。ご一読いただければ
幸いです。

履歴書



- 1925年（大正14年）1月18日、東京浅草花川戸生まれ。
- 1929年（昭和4年）腰越に転居。
- 1937年（昭和12年）横浜市立横浜商業高校（通称Y校）入学
※兵役検査では筋骨薄弱、視力も悪く第三乙となり兵役を免れる。

- 1944年（昭和19年）東京商科大学（現一橋大学）入学
翌年8月15日終戦。
夜、灯りをつけて読書ができ解放感がわきあがったと聞いている。
- 1947年（昭和22年）横浜市立経済研究所に助手として就職。
大学卒業後に2年間特別研究生として国立に通う。
- 1949年（昭和24年）横浜市立大学助手に就任。
- 1952年（昭和27年）同大学の助教授に昇任。この年に結婚。

- 1964年（昭和39年）同大学の教授に昇任。
- 1965年（昭和40年）横浜市金沢区釜利谷町に家を建てる。
- 1966年（昭和41年）インド、スリランカ、シンガポール、マレーシア、タイ、香港、台湾へ1か月かけて調査旅行。



- 1969年（昭和44年）学園紛争のさなか短い期間に学長職務副代理を務める。同年、台湾、タイ、マレーシア、インドネシアに出張。
- 1982年（昭和57年）商学部長並びに大学院 経済学・経営学研究科長 学部長時代に大学の入試改革を実施「共通一次が零点でも合格」がキャッチフレーズ

- 1983年（昭和58年）フランスのリヨンへ商科大学視察。
- 1984年（昭和59年）上海工業大学の管理工学部で国際経済学の講義を行う。
復旦大学の世界経済研究所で講義を行う。歓迎され杭州、桂林の観光を楽しむ。
- 1990年（平成2年）横浜市立大学退職。名誉教授の称号を授与。
同年4月より八千代国際大学（現秀明大学）教授に就任。
- 1994年（平成6年）妻の和江が死去。
- 1996年（平成8年）アメリカ・西海岸を旅行
移民問題に関心があり、日本人町など関連施設を訪れる。
- 1997年（平成9年）秀明大学退職。
- 2002年（平成14年）勲三等旭日章綬章 天皇陛下に拝謁

※横浜市立大学その他、中央大学、横浜国立大学、千葉大学、神奈川大学等にも非常勤講師として勤めていたことがあります。専門分野は国際経済論です。「アジアにおける外国資本の役割」等著書多数。



※1966年「低開発国における外国資本の効果」
1990年「南北問題と多国籍企業」

◆最終講義「日本の対外援助について」より 抜粋
援助の原点、symparthy=「共に苦しみ」「共に喜ぶ」
困っているから金や物をあげるといのではなく、相手と一緒に
なって苦しみ、喜ぶことである。助けることは助けられること。
人間同士の対等な立場での協力関係は、例えば文化交流、技術
交流というべきである。

父のこと

父は母を愛し大切にしておりました。私共が幼い頃、よく我が家に学生さんたちが大勢いらっしゃいました。その度に勉学好きの母は学生さんたちに混ざって楽しそうに話をしていました。まだ世の中全般が貧しかった頃なので、地方から出てきた学生さんたちに母はおにぎりや味噌汁を出していたそうです。

「背広ゼミ・ルックス会」のこと

卒業生の方々が社会人となり、当初は父を囲んで勉強会をしていたようですが、その後各分野で活躍されている方が現場での体験をお話され、それについて皆で語り合うような形になったそうです。会の前半はテーマをもって学ぶゼミ、後半はLUX（ルックス会）というお酒を酌み交わしての楽しい交流が中心だったそうです。不定期開催で、卒業年度に関わりなく、それぞれの場の方たちの情報交換の場や皆が学びあう場と聞いています。私も母から楽しみに同席したと聞きました。卒業して何十年も経っていますのに、いまだに父のことを心配し気遣ってくださる方たちが沢山いらっしゃるのは、皆さん父と母との関わりあいがあったからだと思います。喜寿や米寿のお祝いに100名近い方が駆け付けてくださり、盛大にさせていただきました。米寿の祝いの時に、亡き母に代わり私が出席したのですが、卒業生の方たちから聞いたお話で一番多かったのは「先生に出席日数が足りなかったけど単位をおまけしてもらった」とか「テストの点が悪くて、再度論文を出して単位をもらった」という話が多かったです。

父らしいなぁと思いました。

この時は認知症がだいぶ進んでいて、皆さんのお名前などわからないようでした。



父はとても優しい人で、家庭では父から怒鳴られたり、怒られた事は一度もありません。偉ぶることもなく、どなたに対しても常に対等でした。私が20歳頃、月に一度の割合で母が寝込み、私が家のこと全般と学校の両方で大変な時に、具合の悪い母から心無い言葉が私に向けられ私が部屋の隅で泣いていると父から「病気が言わせているのだから気にはしてはダメだよ」と言って慰めてくれました。私が嫁いでからは、母が寝込むと父はよく買い物かごを下げて母の代わりに近所の市場に出かけたそうです。母が買い物に行くとあちこちのお店の女将さんたちから、父のことを聞かれたそうで人気者なのよと母から聞いたことがあります。

母が亡くなったあと、夜一人で母が好きだった讚美歌「いつくしみ深き」を口ずさんでおりました。その背中がとても寂しそうだったので今でも忘れられません。

お酒が好きでとても強かったです。私が小さい頃は帰って来ない父を飲み屋さんまで迎えに行ったことがあります。酔うとよくお土産を買って帰ってくることがあり、それが楽しみでもありました。

ヘビースモーカーで「いこい」というたばこを一日5箱吸っていたことがあります。声が出なくなったことがあり禁煙してそれ以降一度も吸わなかったもので意志は強いのかもしれません。

カラオケが好きで、谷村新司の「昴」が十八番でした。デイサービスでカラオケがあり、この曲が始まるとすぐにマイクを握って歌っていたそうです。

信仰との出会い

- 1994年 母が病気になり、母と共にユーカーリが丘教会に通い、1月に入院してからは、先生の説教を伝えるために教会に通いました。母の病床洗礼に立ち合い、母亡き後も、礼拝に出席し、熱心に聖書のメッセージに関心を持ち、教会の壮年会活動にも参加し

信仰の求道生活をしました。母の葬儀で長嶋成幸牧師のお話に感動し、自分の葬儀の時も是非、長嶋成幸牧師にお願いしたいと父から頼まれました。

- 1995年8月28日～30日
夏期修養会に参加 伊豆天城山山荘
テーマ「確かな一歩」
- 2018年10月31日 自宅にて
〈好きだった聖句〉

●ヨハネによる福音書 12章35・36節

イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。

※母が眠る墓に「光のあるうちに光の中を歩め」と掘りました。

●コリント人への手紙 第1 13章 新改訳聖書

愛は寛容であり、愛は親切です。また、人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてを我慢し、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。

いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。

むすびに



2013年4月23日 さくらふるさと広場にて

✿大好きだった父へ

どんな時でも誠実にことにあたり、慈しむことを教えて頂きました。心より尊敬し感謝しております。今まで愛情深く育ててくださりありがとうございました。

✿優しくかった父へ

親不孝ばかりして、いつも心配をかけてすみませんでした。そんな私を温かく受け入れ続けてくれてありがとうございました。

今は神様の懷に抱かれて、全ての労苦から解放され平安に包まれている姿が目に見えます。